
脳血管障害(CVD)罹患後の外来血液透析患者の QOL の変遷- KDQOL-SFTM による評価

医療法人衆和会 長崎腎病院

○丸田祥平 林田征俊 藤原久子 丸山祐子 澤瀬健次 原田孝司 船越 哲

【背景】

CVD 罹患後、とくに慢性期における QOL は、患者の生活環境により大きく影響されていることが予測される。

【目的】

CVD 罹患後の外来血液透析患者の QOL、また介護支援と家族の協力、現状が患者の QOL にどう寄与しているかを検討する。

【対象と方法】

当院外来血液透析患者のうち、CVD による入院を経験した 16 名を対象として KDQOL-SFTMver.1.3 を用いて、罹患後 1 年以内と罹患より 2 年後の QOL の変化、また患者支援状況を母集団と比較する。

【結果】

CVD 群では介護保険利用率は高く、介護保険利用状況では要介護 2・3 が多かった。罹患後 1 年以内と罹患より 2 年後の QOL の変化では、腎疾患特異的尺度で『腎疾患の日常生活への影響』のスコアは 2 年間で有意に上昇 ($p=0.038$)、包括的尺度において、『日常役割機能(身体)』も上昇、『日常役割機能(精神)』は有意に上昇していた ($p=0.030$)。

【考察】

CVD 罹患後の QOL の変遷は、リハビリ等により身体機能が改善した結果、活動時間が増加したと考えられ、また患者家族など周囲の支援も寄与していると考ええる。